

世田谷村日記

石山修武

九月九日

十一時過、五反田桐ヶ谷斎場、鈴木隆行君別れの会。鈴木隆行君へのお別れは昨日のコラムに書き残したので、もう死顔は見なくても良いかと思つたのであるが、ふん切りがつかないでいる。五十二才といえばウィリアム・モリス主義者を自称していた小野二郎と同年である。小野二郎と比べれば無名のままに彼は死んだが、死んでしまえば無名有名は関係ない。ただ誰がどのように、鈴木君を記憶しているかだけが、生き残る。歴史というのは膨大な死者の記憶の集積であり、記憶装置の全体的呼称だ。マ、こんな無駄な事メモしてるよりは体動かした方が今の身体には良いから、やっぱり死顔見るのに出掛けようか。しかし、葬式に行くのも結婚式に行くのも、考えてみれば同じ事なのだ。結婚して子供が生まれるからその子が成長して、やがて死ぬんだから。誠に馬鹿馬鹿しい事ではある。

午後、たまたま鈴木君の別れの会で会つた新建築の佐藤君と一緒に研究室に帰る。十四時海光君のインタビューらしきと対面。十六時、照明デザイナー長町志穂さん来室。九州〇邸の照明打合せ。二十時前修了。近江屋で会食。二十二時過おわり、二十三時半世田谷村に戻る。○時半ねむる。

九月十日

午前中休む。山田脩二に電話、昨日の鈴木君のお別れ会の事。もう少し、静かに送ってやりたかった。彼だって早く忘れられて

しまいたい位の悲哀の中にいたのだろうから。御両親、兄妹の方々にもお目にかかったのだが、皆さん彼と顔がうり二つで驚いた。家族というのは不思議なものだ。十六時研究室にてモスクワの若松氏と打合せ。モスクワ、世界貿易センター内に研究室の開設準備室開設完了。

十七時半古市 Jr 来室。彼は我々の世代が作り出した人間の典型の一つタイプだ。彼と対面すると、ある意味では自分達が創り出した世界の一部と対面している様な気さえする。二〇時過まで。もつと話してみたかったが、切り上げた。

今晚から明日にかけて衆議院選挙の結果への序章で狂騒の時になるだろう。今回の選挙騒動で興味深かったのは政治家達それぞれの品位見識というよりも、TV、新聞を介して知る事ができたジャーナリストも含めた、日本の一定な知識人達のそれが露出された事だろう。改革の表面的な意味だけが問われ続けたが、本来は保守の意味こそが問われなければならないと思うが……。保守という概念こそが革新的な価値を持ち始める困難な時代になった。まさに建築が対面している問題と同一なのだ。